

音楽ができる・できない

野 上 俊 之

「音楽の先生」というと、先ず、ピアノが上手というイメージを抱く人が意外に多いようである。私事であるが、学生時代の友人に、高校3年生になってからピアノを始め、現在、高校の音楽教員になっている男がいる。彼は、音楽＝ピアノという図式の中でのピアノ演奏にプレッシャーを感じるそうである。また別の友人で、高校生になってからピアノ科の教授に就こうとしたら無下に断られたという者がいる。早や手遅れであるとのこと。ピアニストとして不向きということであった。皮肉にも、彼はピアノ科に入学したのであるが――。

最近、日本人の演奏による西洋音楽の評価には目覚ましいものがある。賞賛を得た人は、音に対する感受性の強い年代に始めた才能教育を地で行くのであろうか。とはいうものの、現在では“三児の魂”というよりも“胎児の魂”という時代ではあるが――。

本学の幼児教育科の学生に、音楽は好きだけど音楽の授業は嫌いというのが相当数いる。指導する立場としては、耳がいたい話であるが、まさに“音が苦”の状態である。音楽ができる・できないという分かれ目は、案外この辺りにあるかもしれない。

一般に、いい声の人、指がよく動く人のことを「あの人は音楽ができる」という

が、音楽ができるとは何か？

高校生になってからではピアニストになれない。ピアノ科の教授が言うのだから間違いはないであろう。筋肉の発達段階を考えれば、本人の努力だけでは如何ともしたい事実である。今更、7連符でもあるまい。

指がよく動かないと、聞く人が驚くような技巧的に難しい、バガニーニヤリストの曲は演奏できないことになる。音楽の能力評価がメカニックな面に片寄れば、それはより助長される結果となるであろう。

一方、いわゆる耳がいい、勘がいいということは、音楽的にすぐれていると評価されるが、果たしてそういえるか。脳で受信することはできても、発信できないケースがある。つまり自己表現できないこと。音楽の基本ともいえることができない。これは、子ども自体が持っている音楽的なものを引き出す過程、即ち、音楽教育の問題とも密接な係わりがある。

一度、できないというレッテルをはられると、いつもできないのが音楽である。しかし、何ができないかということ、反応のスピードからくる切り捨てによるものが多い。音楽環境の違いによる順応の遅さ。ド

レミが歌えなくても、民謡が歌えるケースはいくらでもある。異質な音構造にとまどうため調子っ外れになるだけである。自己表現できる子どもほど逸脱していき、不当な評価をされることになる。これは指導者の度量とも関係するようであるが、逸脱の中の喜び、発見が表現力へと結びつくことを考えれば、評価も不合理である。

この逸脱を、即興的表現にすり替えていくようなことが不可能であろうか。即興的な演奏を手掛かりとして、子どもの創造的な力をよびさまし、要素的学習に発展させる、ダルクロズやオルフの理念のように。

子どもの中には、ピアノを習いはじめて2、3カ月すると、いやになってやめる子がいる。その多くは逸脱が認めてもらえないからである。指の練習・読譜・音楽の知的理解という三つの苦役ばかりやらされる。例えば、1・3・5の指使いが1・2・4になっているとか、音楽のイメージにあうテンポで弾いたら指が動かないからスローテンポで弾かされるとか、楽譜に書いてない調で弾いたらだめであるなど、かなり高度な逸脱にもかかわらず、楽譜と違うということ、楽しみを奪われていく一面がある。その結果、楽譜を鍵盤上に置きかえる曲芸師が、音楽のできる扱いを受けることになる。

一定のフォームがあって、それを固定化し、普遍化していく。他人より、より早く、より巧妙に抜かりのない訓練のなかで。あたかも、管理主義に陥り、規制でがんじがらめにし、子どもの好奇心や主体性、創造性の芽を摘みとっている現在の学校教育のようである。これは由々しき問題である。

逸脱が認められないのは、西洋のブルジョア音楽・エリート文化の限界であろうか。徒弟制度のように、規範性の中での上下関係でしか音楽できないような——。そもそも、発生源的には、ヘテロフォニーのような個性のぶつかり合いというようなものが音楽にはある。音楽することの社会的意識変革でもあれば、底辺の拡張にもなり、少数派の音楽から脱皮することも可能であるが。

逸脱を手掛かりとして、音楽を生活化していく中で、音楽に対する見方、考え方を変えていく。価値観という常識を否定するような新たな文化として。そこには、音楽ができる・できない、高校生からでは遅過ぎるというよりも、人間によって作られた音楽をフィードバックして、人間とは何かを考えることがあっていい。

(講師)

【名 言】

人類はその技術と知性においては原子力時代に住んでいるが、その情緒においては、いまなお、石器時代に住んでいる。

— E. フロム —